

3. 定点把握対象感染症患者報告状況（週報）

（１）過去５年間の報告状況

疾患名	2019 年 (令和元年)	2020 年 (令和 2 年)	2021 年 (令和 3 年)	2022 年 (令和 4 年)	2023 年 (令和 5 年)
インフルエンザ	10,024	3,095	4	42	13,896
新型コロナウイルス感染症 ¹⁾					10,061
RS ウイルス感染症	1,862	140	2,912	1,214	1,591
咽頭結膜熱	563	222	242	205	1,117
A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎	772	475	254	109	544
感染性胃腸炎	6,192	3,365	4,397	4,006	5,193
水痘	262	192	128	70	68
手足口病	2,086	71	678	410	530
伝染性紅斑	666	115	6	4	7
突発性発しん	470	514	502	399	346
ヘルパンギーナ	486	170	411	66	1,107
流行性耳下腺炎	56	50	30	19	22
急性出血性結膜炎	3	—	—	—	2
流行性角結膜炎	117	29	21	11	26
細菌性髄膜炎	3	3	1	4	5
無菌性髄膜炎	7	4	3	6	12
マイコプラズマ肺炎	131	43	7	2	1
クラミジア肺炎	1	—	—	—	—
感染性胃腸炎（ロタウイルス）	8	1	1	—	—

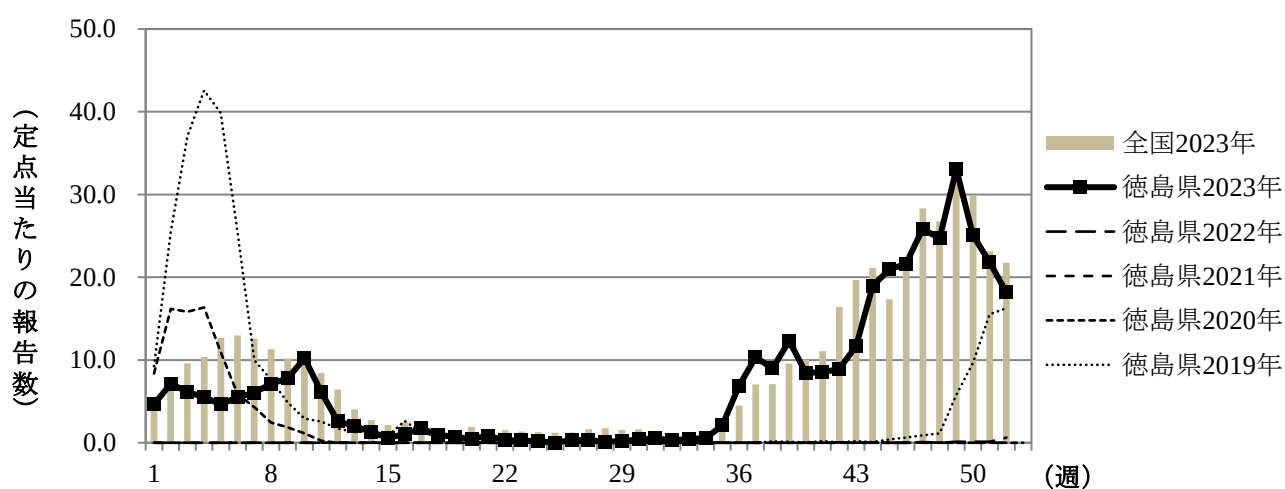
¹⁾令和 2 年 2 月 1 日より指定感染症に追加指定、令和 3 年 2 月 13 日より新型インフルエンザ等感染症に変更、令和 5 年 5 月 8 日より定点把握対象疾患感染症（五類感染症）へ指定された。

(2) 各疾病の報告状況

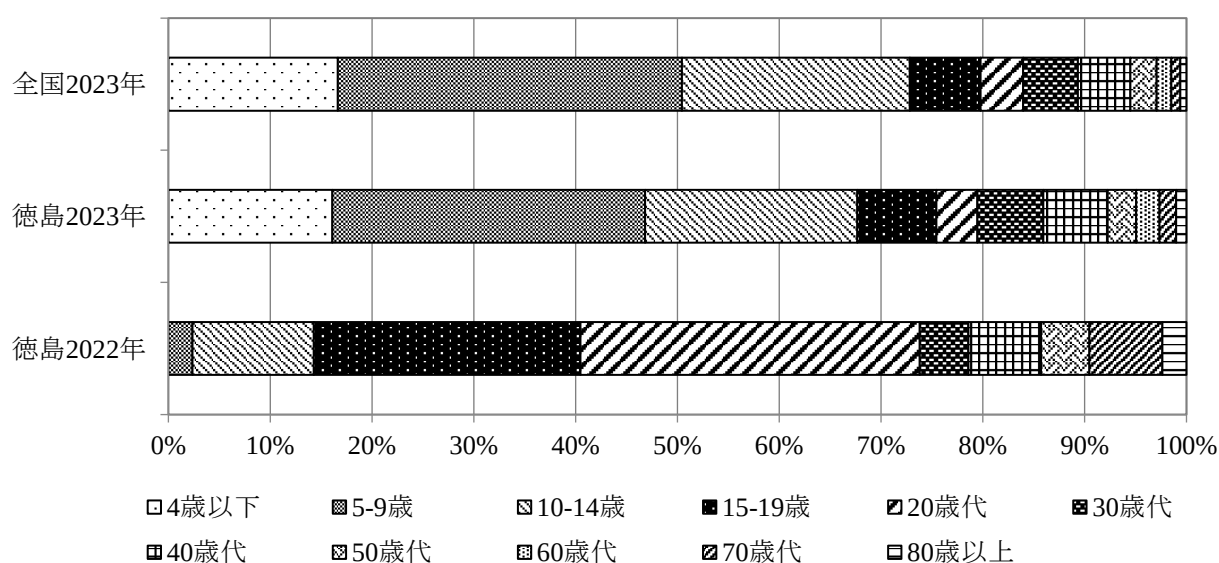
① インフルエンザ（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）

年間報告数は13,896人であり、報告数が少なかった2020年（3,095人）、2021年（4人）、2022年（42人）に比べ、大きく増加し、過去10年で最高の報告数となった。2022－2023シーズンは、定点当たりの報告数が、2023年第35週に2.08人と1.0人を超えて流行期に入った。2023年第37週には、10.35人と注意報発令基準を超え、2023年第49週には、33.08人と警報発令基準を超えた。年齢層別報告数では、4歳以下16.1%、5～9歳30.7%、10～14歳20.9%、15～19歳7.8%、20歳以上24.6%であり、5～14歳の割合が高かった。

【インフルエンザの週別患者報告状況】



【インフルエンザの年齢層別報告数】

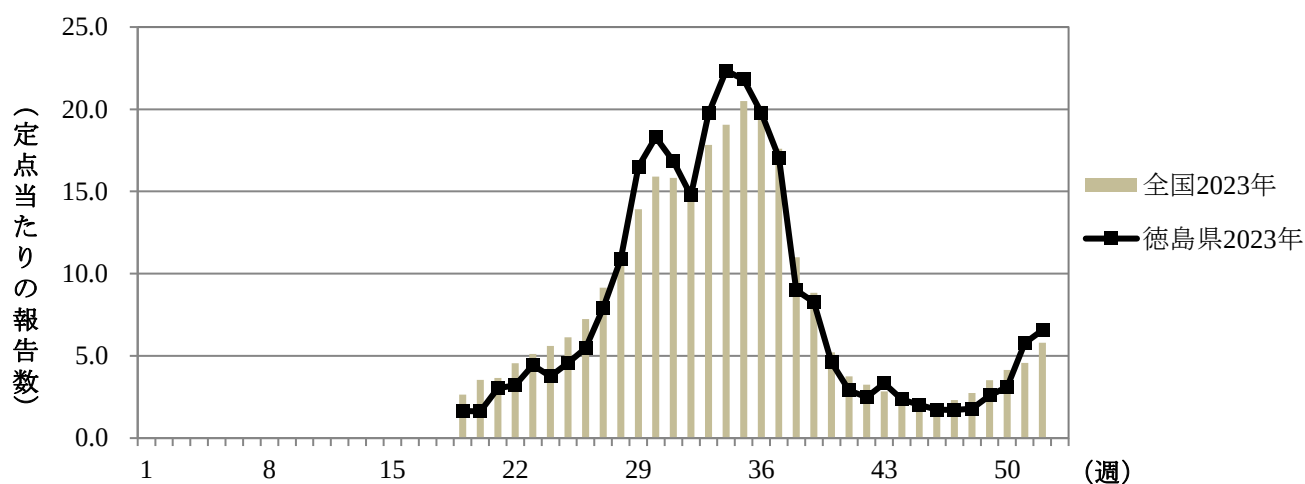


② 新型コロナウイルス感染症

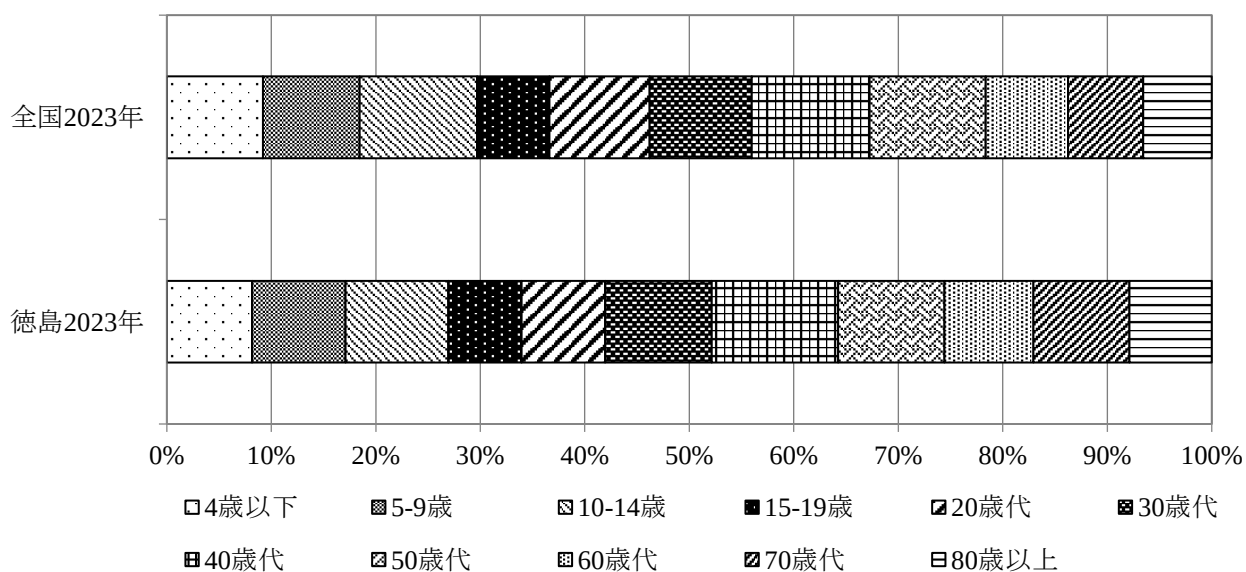
2023年5月8日から定点把握対象疾患感染症（五類感染症）に変更され、2023年第19週から対象疾患となった。年間報告数は10,061人であり、定点当たり報告数では、6月下旬（第25週）から増加し、7月上旬（第28週）には10.89人と10.0人を超え、8月下旬（第34週）でピーク22.35人を迎えたが、9月中旬（第38週）には、9.00人と10.0人を下回った。11月下旬（第47週）には、1.70人まで減少したが、その後、やや増加傾向を示している。

年齢別報告数は、4歳以下8.2%、5～9歳8.9%、10～14歳9.9%、15～19歳7.0%、20歳代8.0%、30歳代10.2%、40歳代12.1%、50歳代10.2%、60歳代8.5%、70歳代9.2%、80歳以上7.9%と、年齢別での大きな差はなかった。

【新型コロナウイルス感染症の週別患者報告状況】



【新型コロナウイルス感染症の年齢層別報告数】



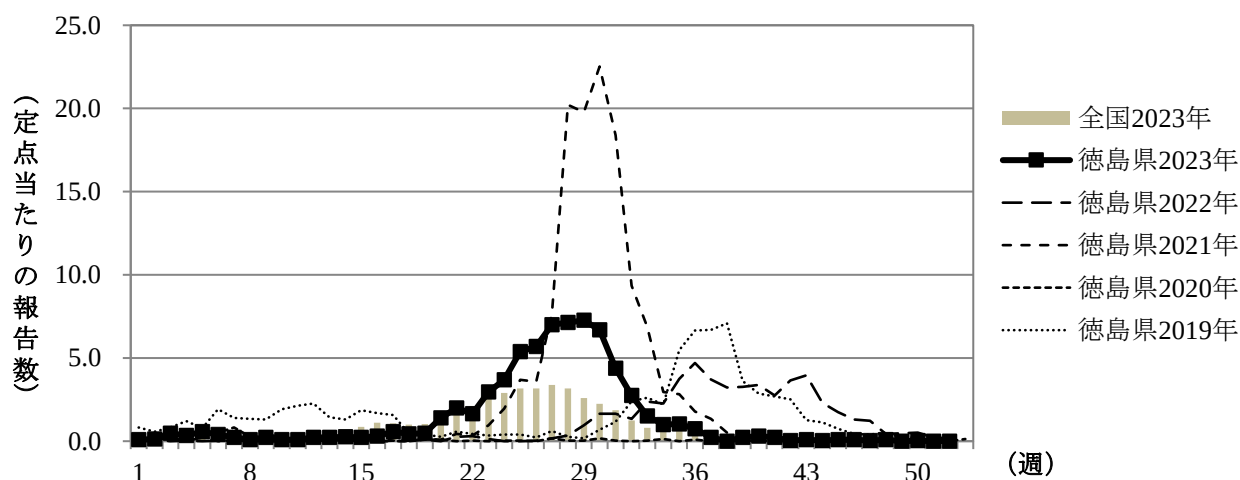
③ RS ウイルス感染症

年間報告数は1,591人と、前年（1,214人）より増加した。

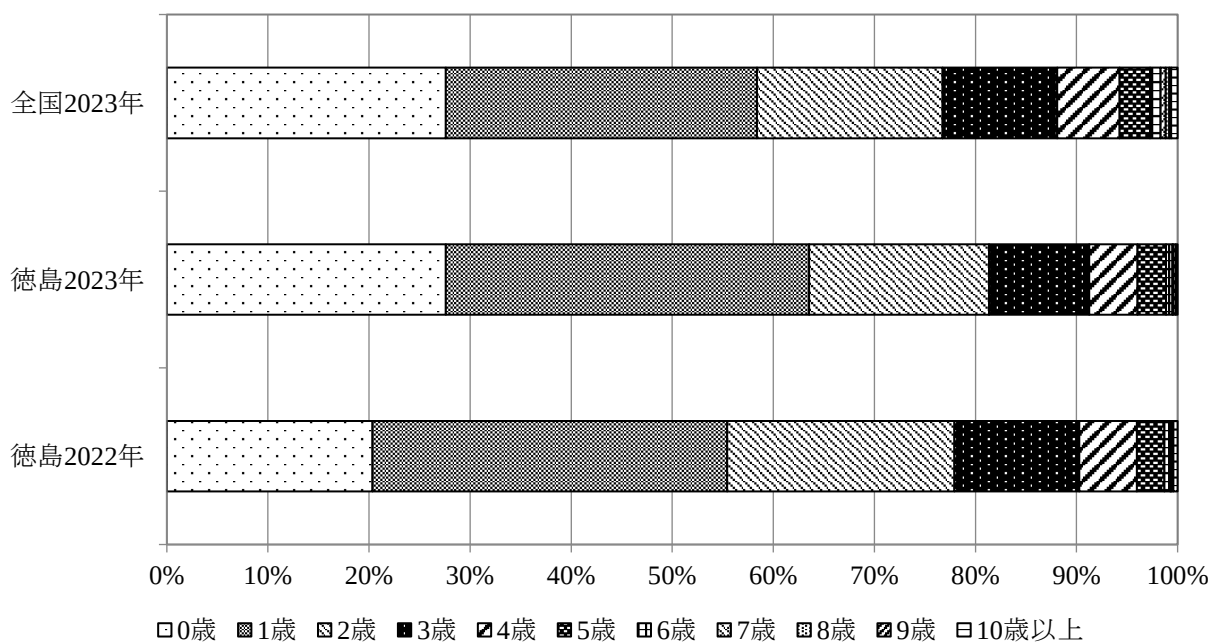
2017年以降、夏から秋にかけて流行していたが、本年は5月中旬（第20週）から増加し、7月中旬（第29週）にピーク（7.26人／定点）を迎えた。第23～36週で全国平均を上回り、この間の報告数は年間の約83%を占めた。

本疾患は、2歳までの乳幼児からの報告が多く、本年の年齢層別報告数は、0歳27.6%、1歳36.0%、2歳17.8%、3歳9.9%、4歳以上8.7%であった。

【RS ウイルス感染症の週別患者報告状況】



【RS ウイルス感染症の年齢層別報告数】



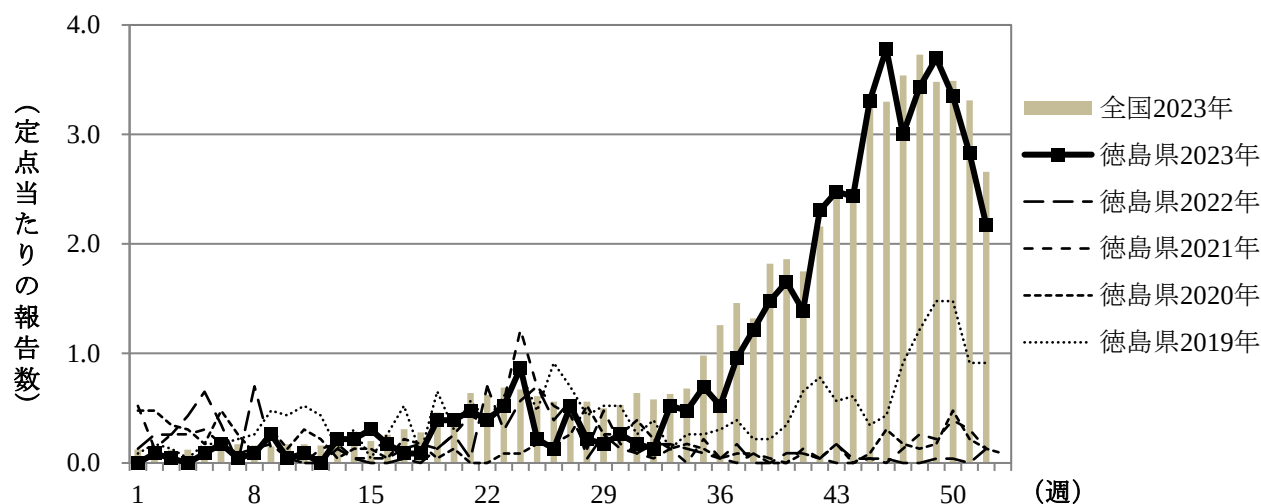
④ 咽頭結膜熱

年間報告数は1,117人と、前年（205人）を大きく上回り、過去10年間で最も多かった。

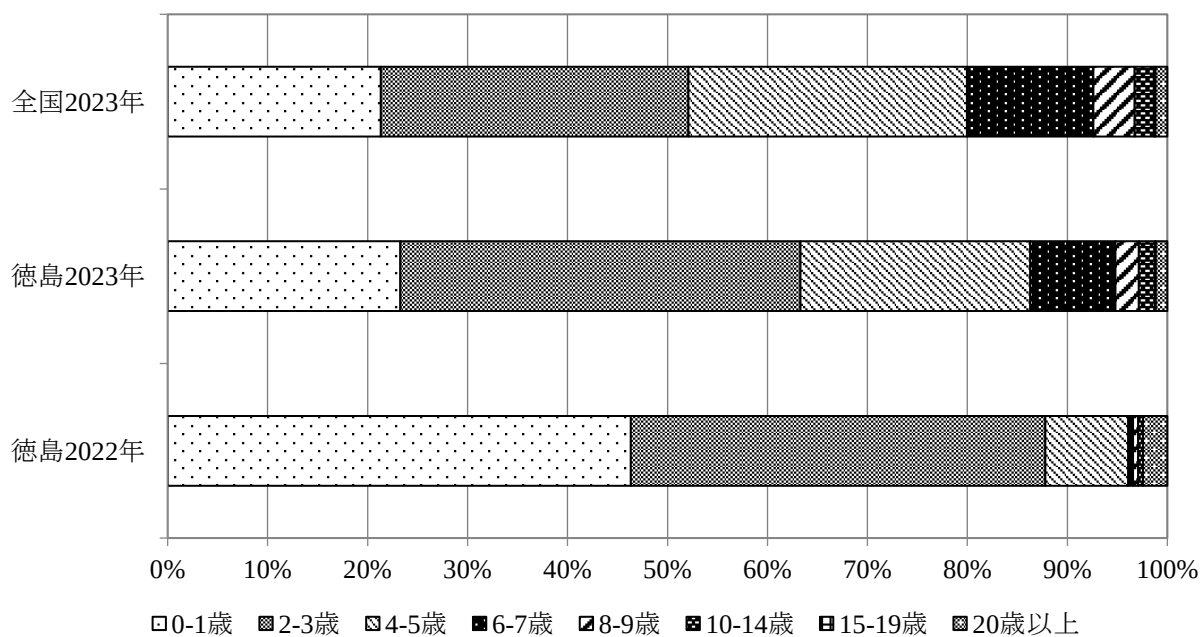
本年は9月に入り増加傾向が見られ、11月中旬（第46週）にピーク（3.78人／定点）を示した。

年齢層別報告数は、0～1歳23.3%、2～3歳40.0%、4～5歳23.0%、6～7歳8.5%、8歳以上5.2%であり、5歳以下が約86%を占めた。

【咽頭結膜熱の週別患者報告状況】



【咽頭結膜熱の年齢層別報告数】



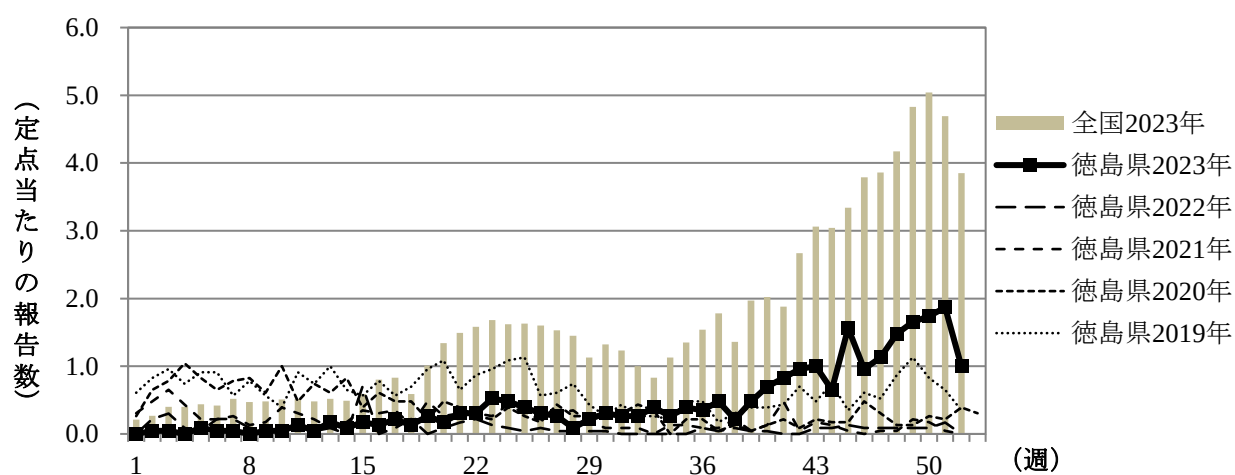
⑤ A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎

年間報告数は 544 人と、前年（109 人）より大きく増加した。

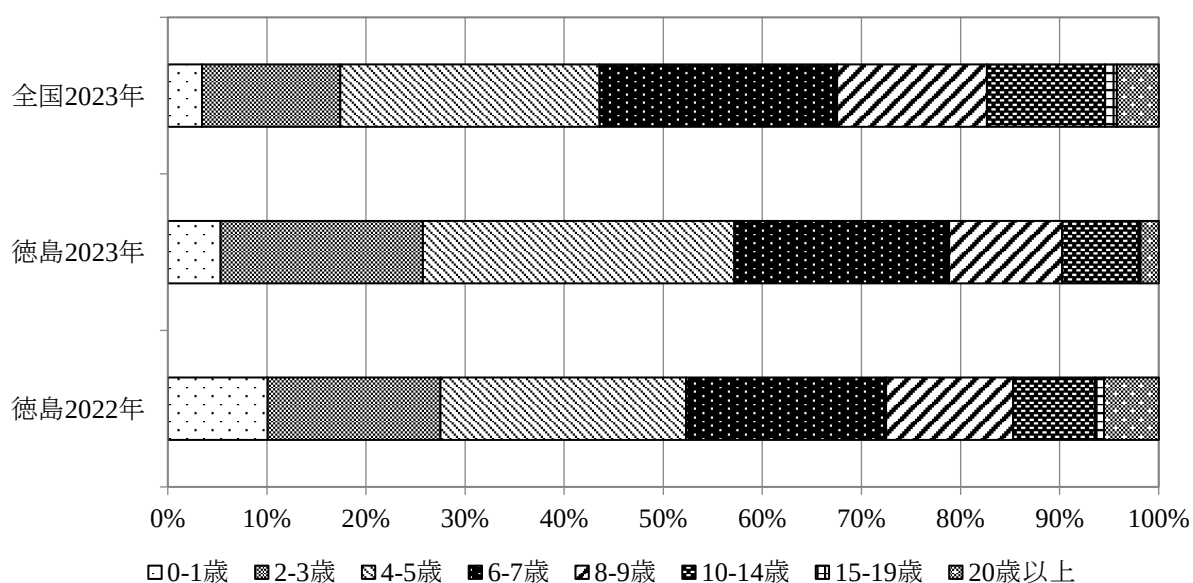
本疾患は、冬季及び春から初夏にかけて増加するとされる。本年は 10～12 月に増加傾向が見られ、12 月下旬（第 51 週）にピーク（1.87 人／定点）を示した。

年齢層別報告数は、0～1 歳 5.3%、2～3 歳 20.4%、4～5 歳 31.4%、6～7 歳 21.7%、8～9 歳 11.4%、10～14 歳 7.7%、15 歳以上 2.0%と、2～7 歳が全体の約 74%を占めた。

【A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎の週別患者報告状況】



【A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎の年齢層別報告数】



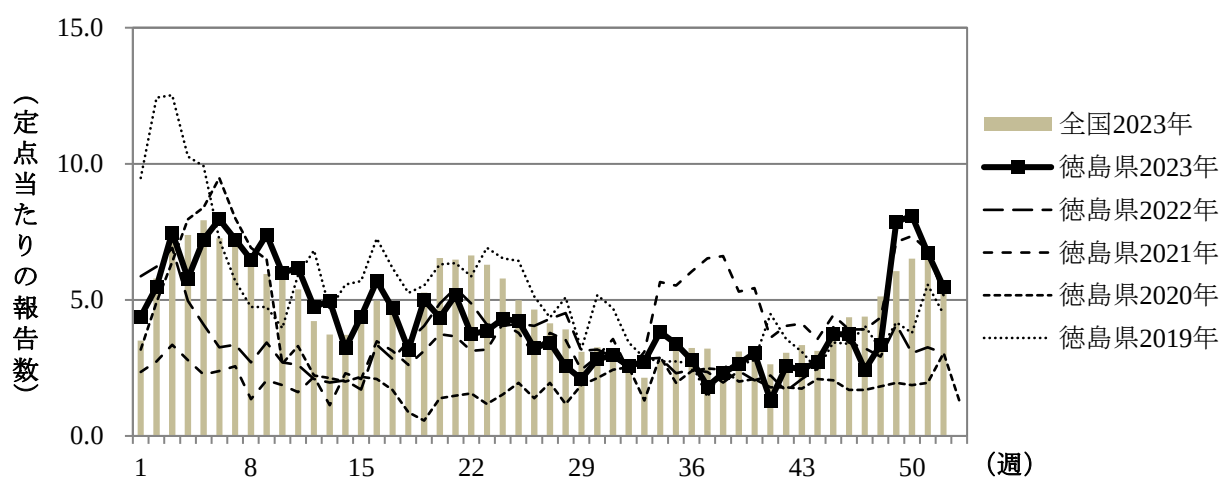
⑥ 感染性胃腸炎

年間報告数は 5,193 人と、前年（4,006 人）より増加した。

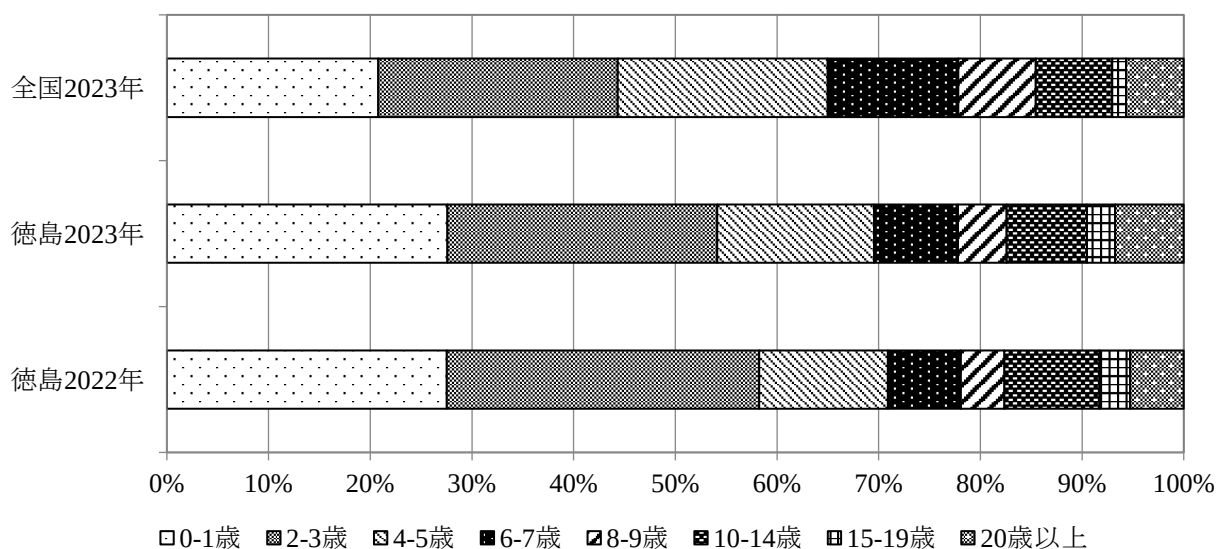
本疾患の流行パターンは、初冬から増加し 12～1 月頃に一度ピークが見られた後、春にもう一度なだらかなピークができ、その後初夏まで続くことが多い。本年の前期流行は、前年から引き続いて年初（第 1 週）から増加傾向を示し、2 月上旬（第 6 週）でピーク（7.96 人／定点）が見られ、12 月から再び増加傾向を示し、12 月中旬（第 50 週）でピーク（8.09 人／定点）が見られた。

年齢層別報告数は、0～1 歳 27.6%、2～3 歳 26.6%、4～5 歳 15.4%、6～7 歳 8.2%、8～9 歳 4.8%、10～14 歳 7.9%、15 歳以上 9.5%と 5 歳以下の乳幼児が全体の約 70%を占めた。

【感染性胃腸炎の週別患者報告状況】



【感染性胃腸炎の年齢層別報告数】



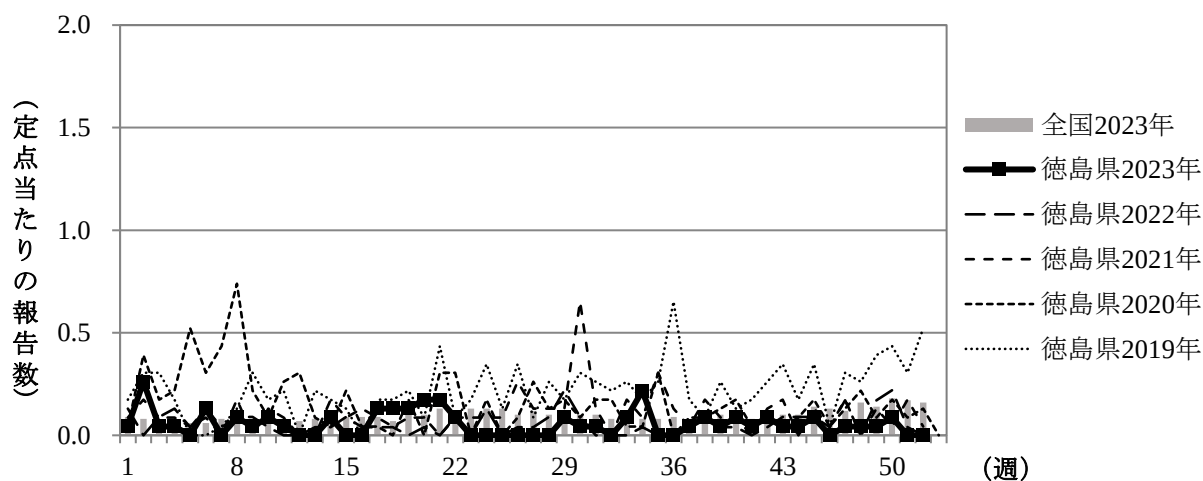
⑦ 水痘

年間報告数は68人と、2017年（352人）以降、減少傾向が続いており、過去10年間で最も少ない報告数であった。

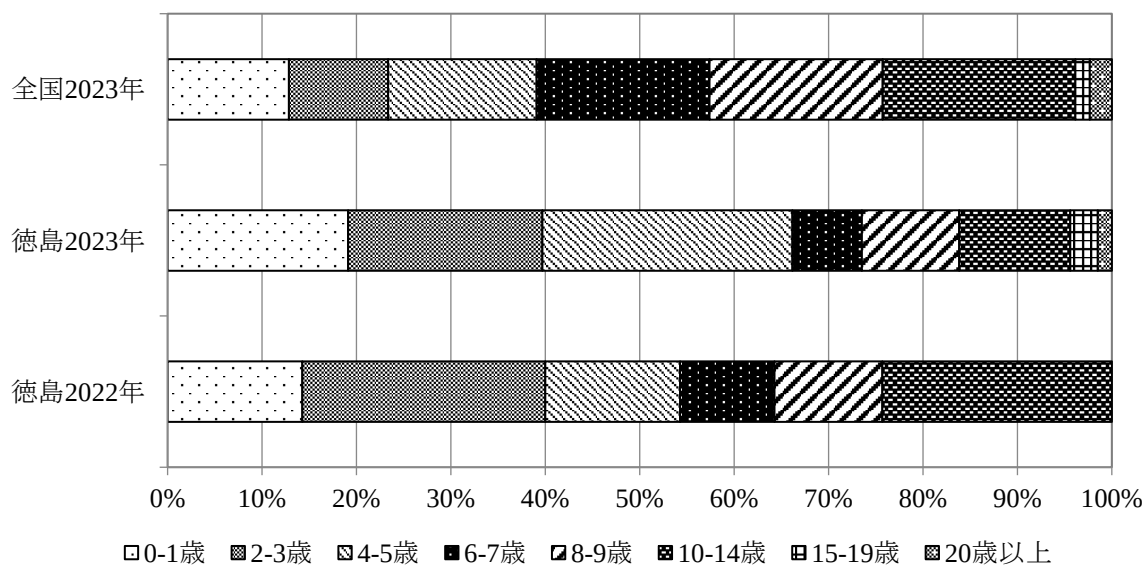
本疾患は年間を通して発生するが、主に冬から春にかけて流行するとされる。本年は大きなピークは見られず、低水準（0.26人／定点以下）のまま推移した。

年齢層別報告数は、0～1歳19.1%、2～3歳20.6%、4～5歳26.5%、6～7歳7.4%、8～9歳10.3%、10歳以上16.2%と10歳未満が全体の約84%を占めた。

【水痘の週別患者報告状況】



【水痘の年齢層別報告数】



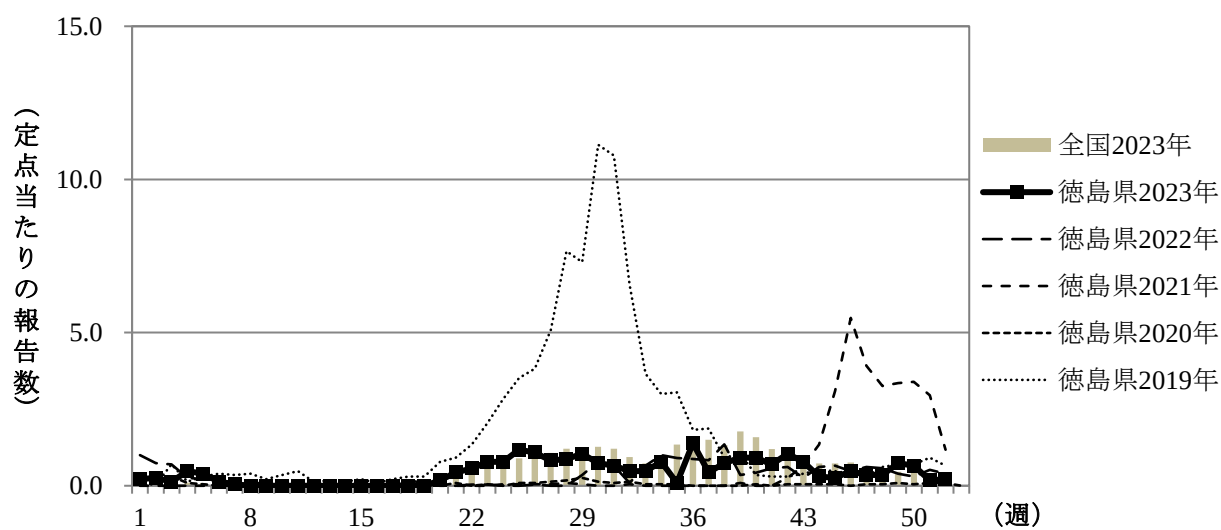
⑧ 手足口病

年間報告数は 530 人と、前年（410 人）よりやや増加した。

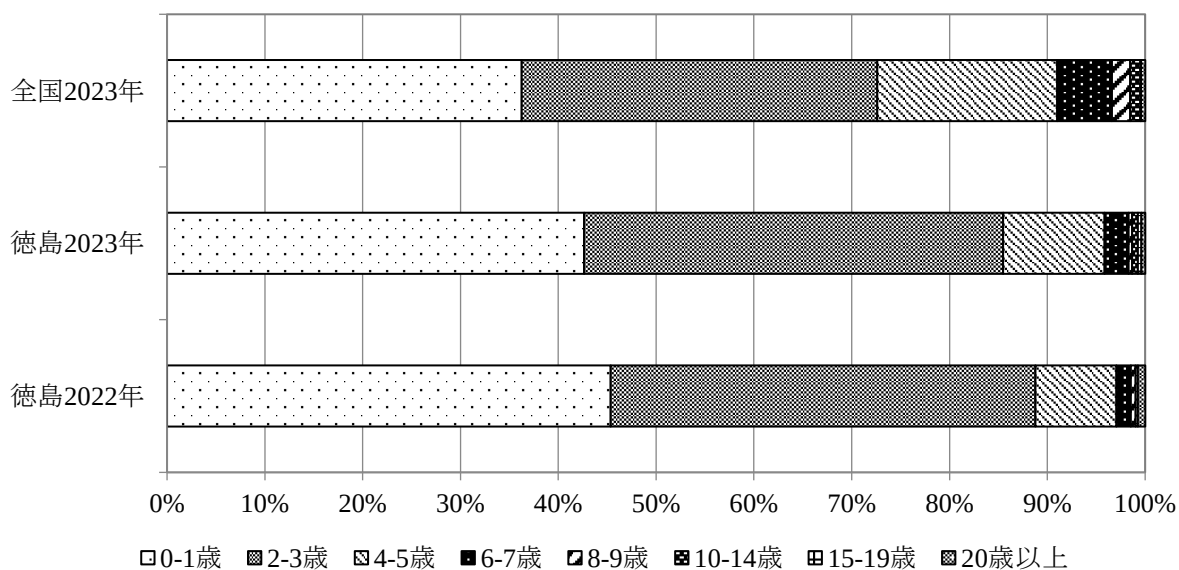
本疾患は夏期に流行することが多い感染症であるが、本年は、年間を通じて低水準のまま推移し、大きなピークはなかった。

年齢層別報告数は、0～1 歳 42.6%、2～3 歳 42.8%、4～5 歳 10.4%、6～7 歳 2.5%、8 歳以上 1.7%であり、5 歳以下が全体の約 96%を占めた。

【手足口病の週別患者報告状況】



【手足口病の年齢層別報告数】

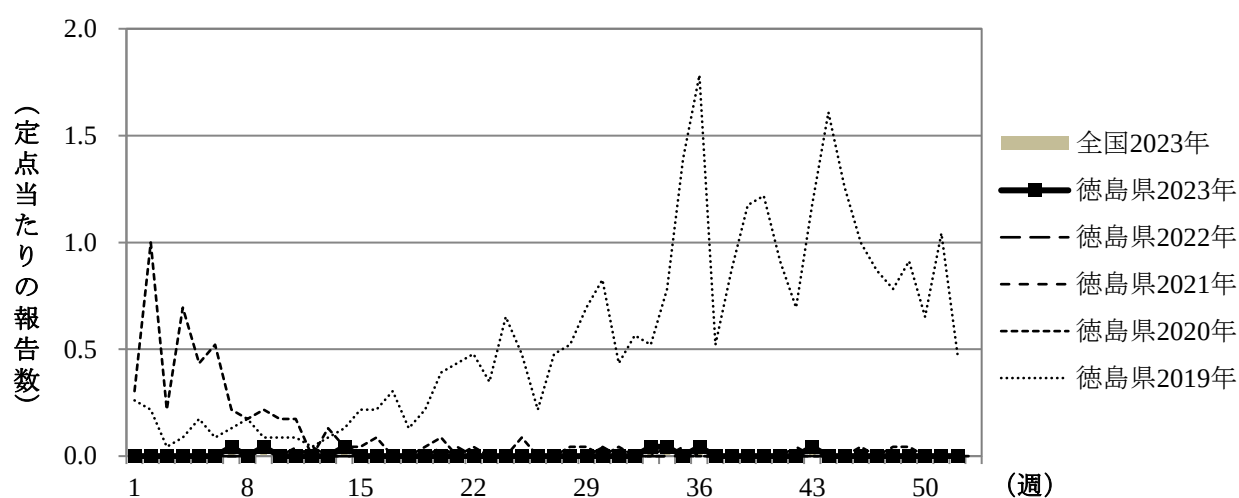


⑨ 伝染性紅斑

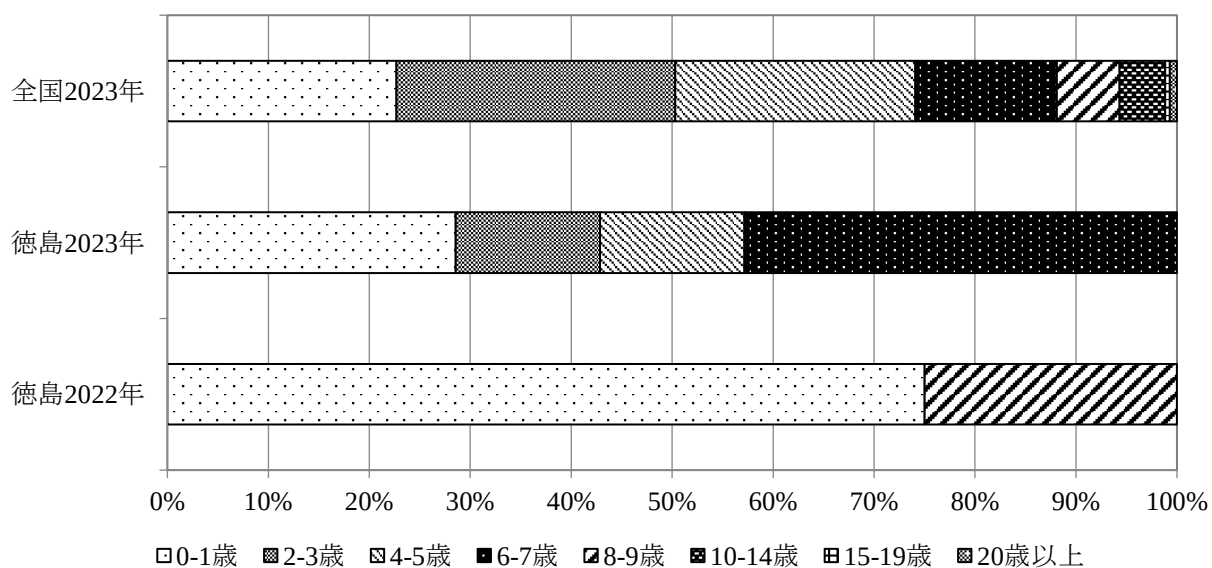
年間報告数は7人と、調査開始以降、最も少なかった前年（4人）と同程度であり、年間を通じて低水準（0.04人／定点以下）で推移した。

年齢層別報告数は、0～1歳 28.6%、2～3歳 14.3%、4～5歳 14.3%、6～7歳 42.9%と、全て7歳以下からの報告であった。

【伝染性紅斑の週別患者報告状況】



【伝染性紅斑の年齢層別報告数】



⑩ 突発性発しん

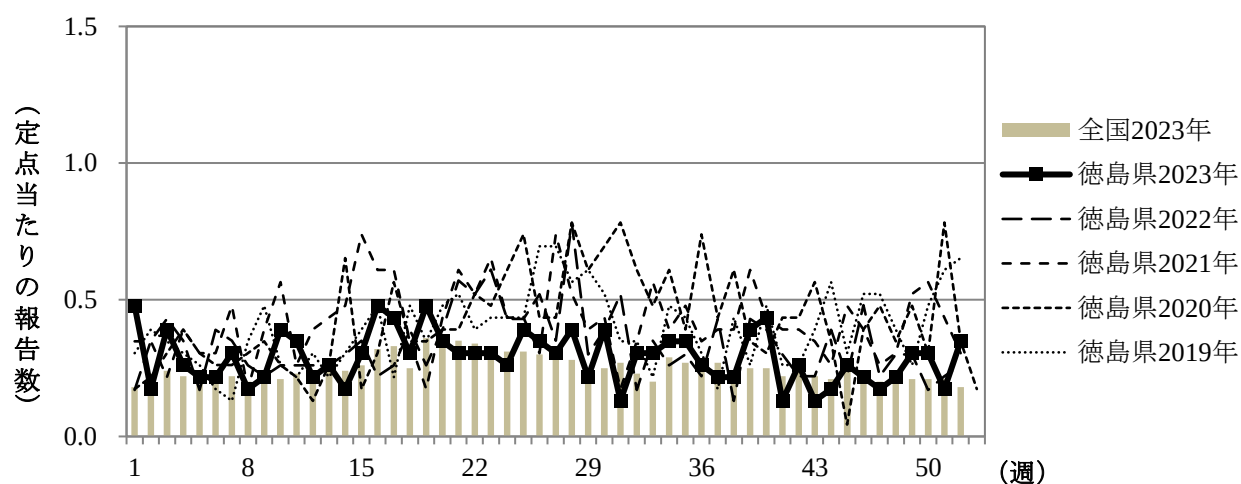
年間報告数は 346 人と、調査開始以降、最も少なかった。

本疾患は、季節性も年次推移も認められず、年間を通じてほぼ一定の範囲内で推移するとされ、6 か月～1 歳の小児に好発し、ほとんどの子どもが 3 歳までに感染するといわれている。

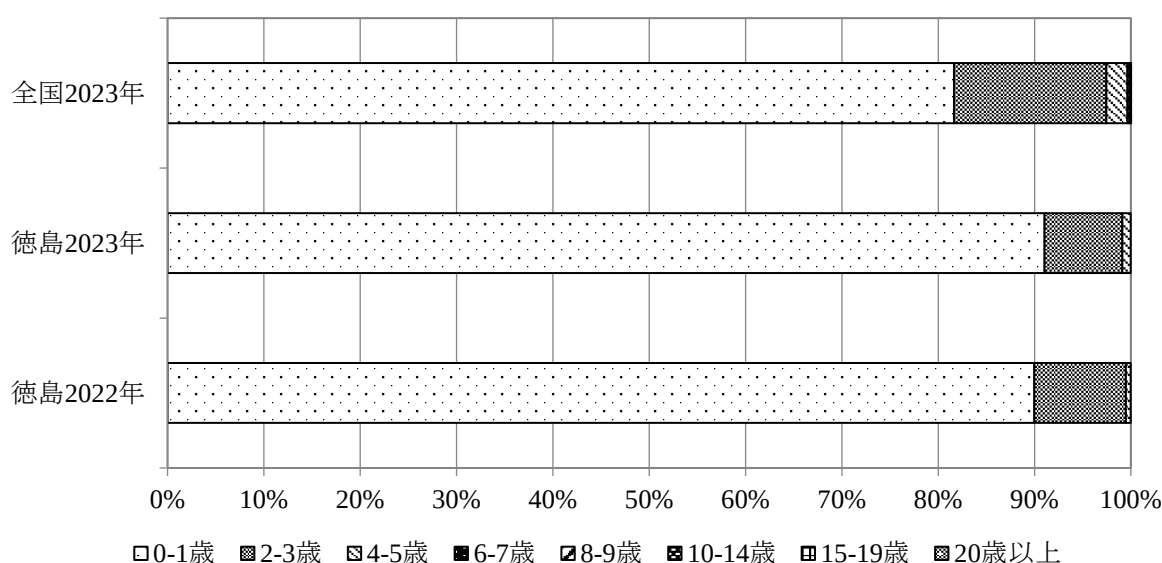
本年もピークは示さず、大きな季節的変動も見られないまま、一定の範囲内（0.13～0.48 人／定点）で推移した。

年齢層別報告数は 0～1 歳 91.0%、2～3 歳 8.1%、4～5 歳 0.9%と、1 歳以下が大半を占めた。

【突発性発しんの週別患者報告状況】



【突発性発しんの年齢層別報告数】



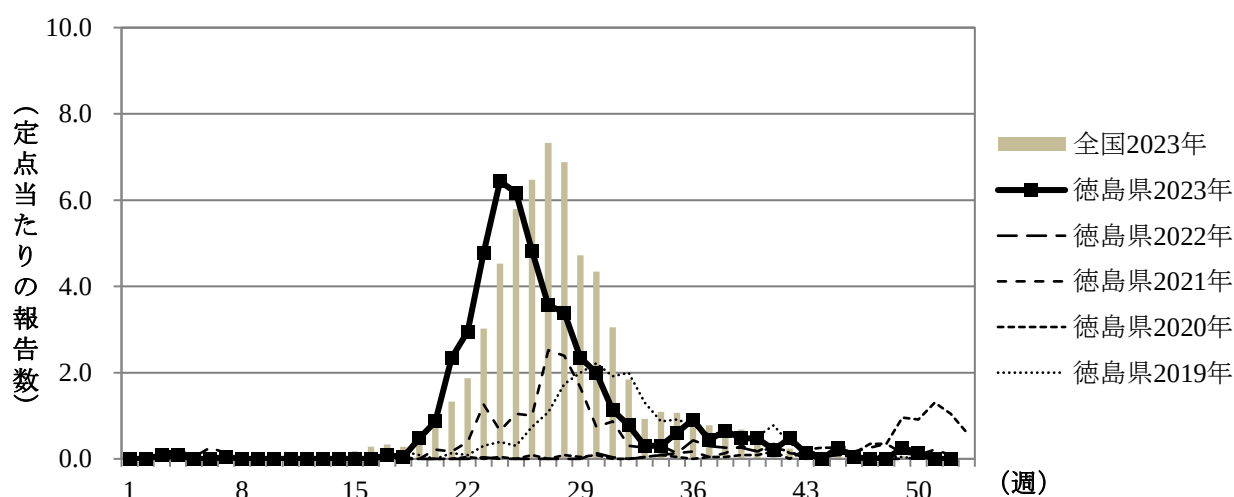
⑪ ヘルパンギーナ

年間報告数は1,107人と、前年（66人）を大きく上回って、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行以前の水準に戻り、過去10年間で最も多い報告数であった。

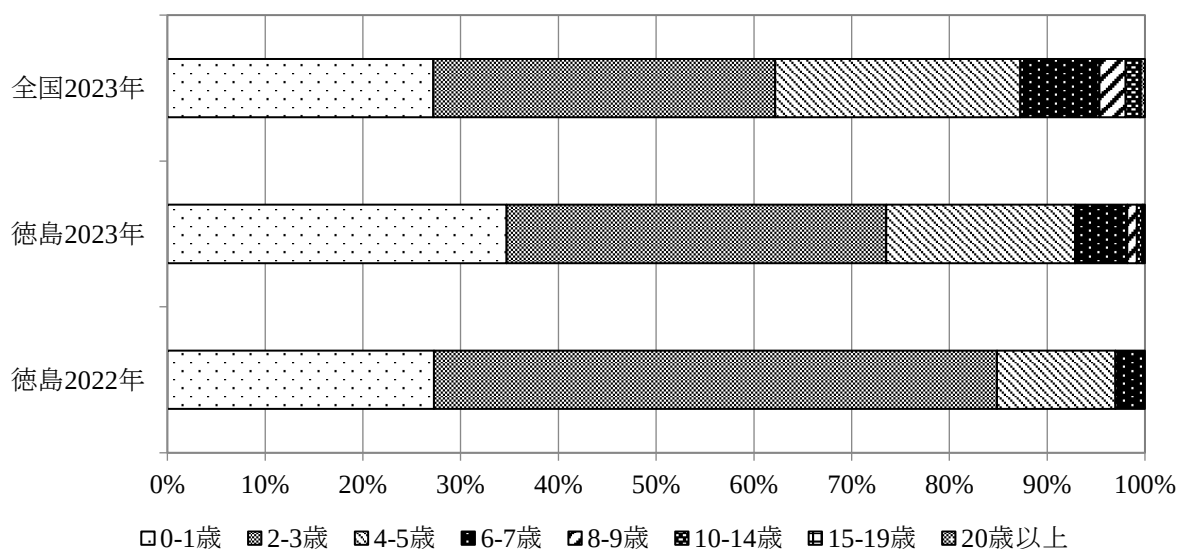
本疾患は、手足口病とともに主に乳幼児の間で流行する夏期の代表的な感染症である。本年は、5月下旬（第21週）から報告数が増加し始め、6月中旬（第24週）にピーク（6.43人／定点）を示した。その後、減少傾向となり、8月上旬（第32週）には、1.0人未満となり、流行を終えた。

年齢層別報告数では、0～1歳 34.7%、2～3歳 38.8%、4～5歳 19.3%、6～7歳 5.3%、8歳以上 1.8%であり、5歳以下の乳幼児が約93%を占めた。

【ヘルパンギーナの週別患者報告状況】



【ヘルパンギーナの年齢層別報告数】



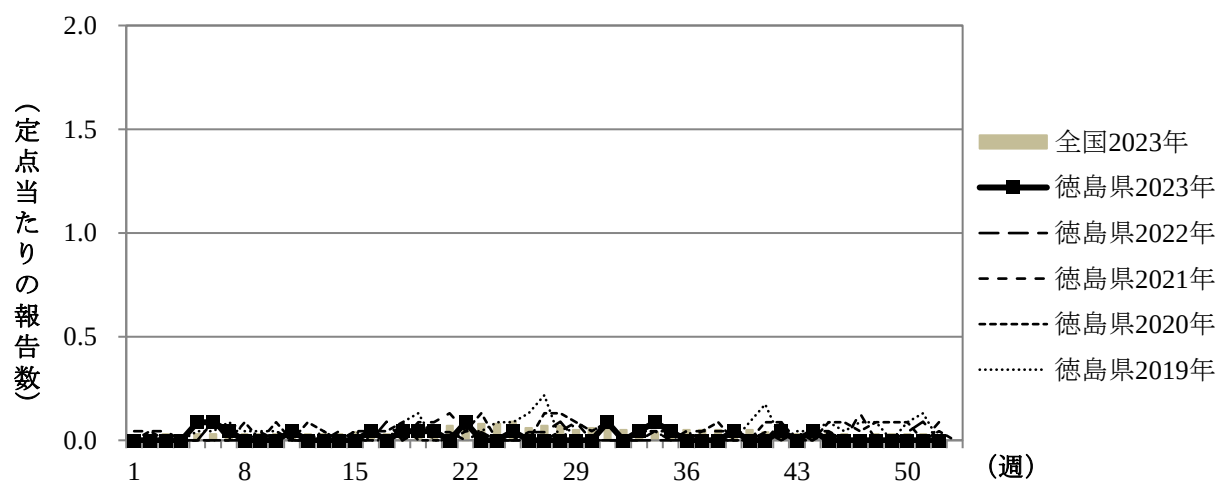
⑫ 流行性耳下腺炎

年間報告数は22人と、過去10年間で最も少なかった前年（19人）と同程度であった。

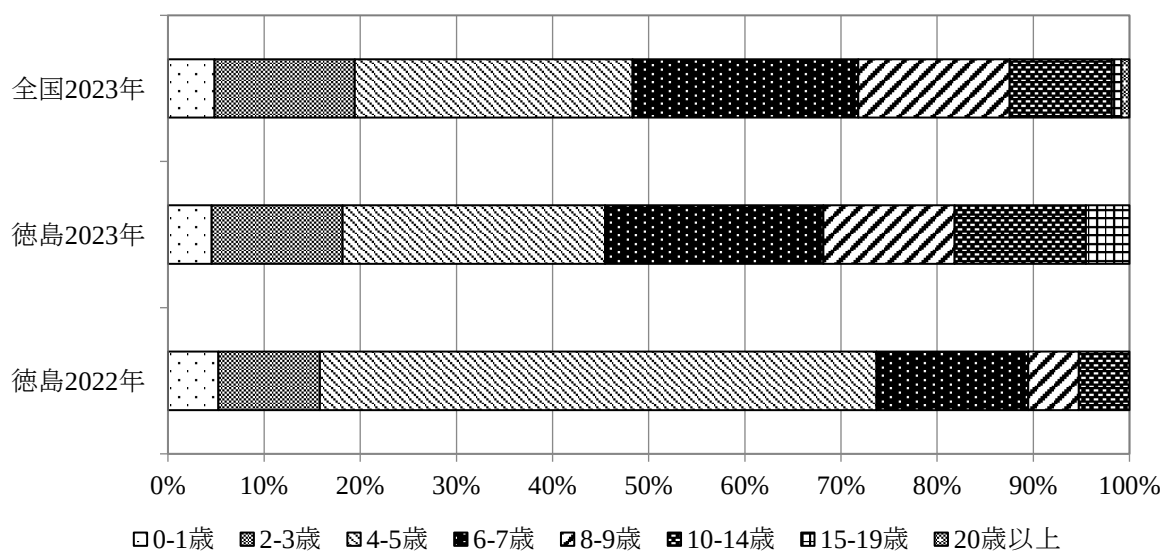
過去10年間では2016～2017年に大きな流行があった。

年齢層別報告数は、0～1歳4.5%、2～3歳13.6%、4～5歳27.3%、6～7歳22.7%、8～9歳13.6%、10歳以上18.2%であり、4～7歳が半数を占めた。

【流行性耳下腺炎の週別患者報告状況】



【流行性耳下腺炎の年齢層別報告数】

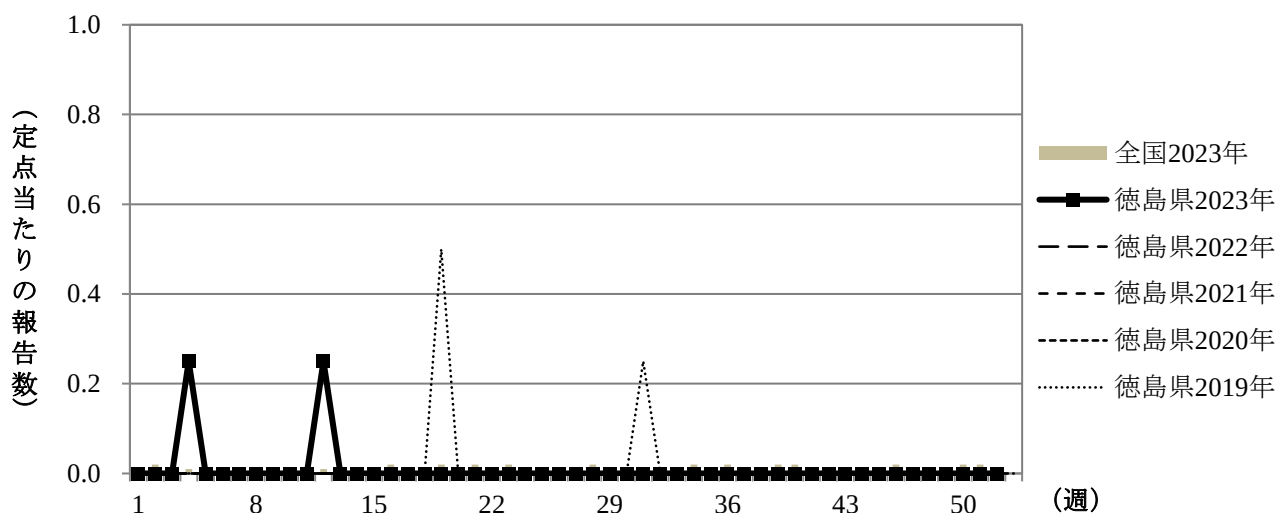


⑬ 急性出血性結膜炎

年間報告数は2人と、過去5年間では2019年（3人）以降は報告が無く、4年ぶりの報告であった。本疾患は局地的に流行することがあるが、流行のない年は季節性も見られず、報告数は低いまま微増微減を繰り返すとされている。

年齢層別報告数は、2人とも20歳代であった。

【急性出血性結膜炎の週別患者報告状況】

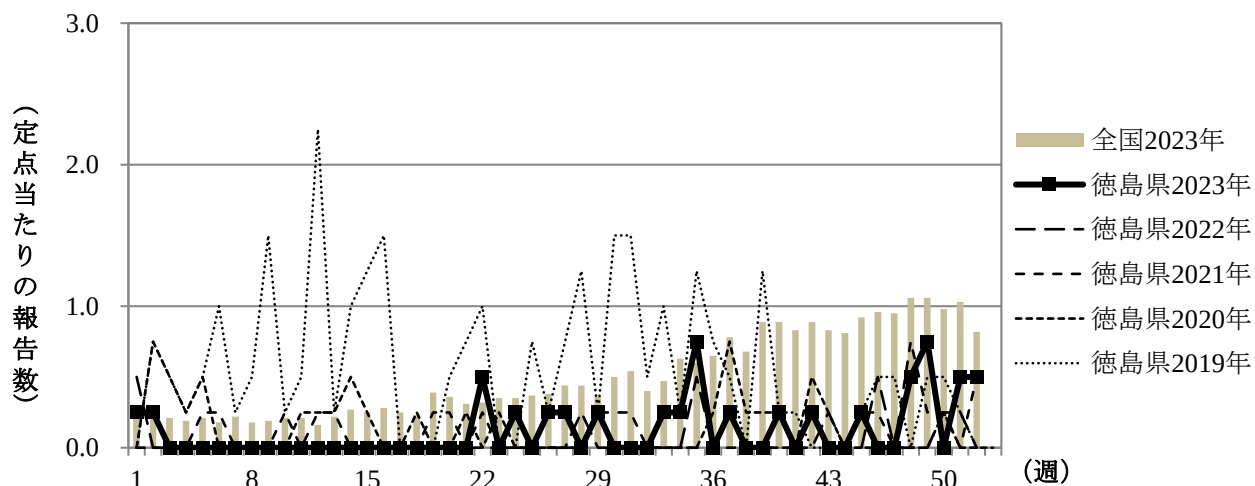


⑭ 流行性角結膜炎

年間報告数は26人と前年（11人）より増加した。県内では2019年に年間117人報告されたが、その後は低値で推移している。

年齢層別報告数は、20歳未満15.4%、20歳代7.7%、30歳代34.6%、40歳代23.1%、50歳代7.7%、60歳以上11.5%と、30～40歳代の年齢層が多かった。

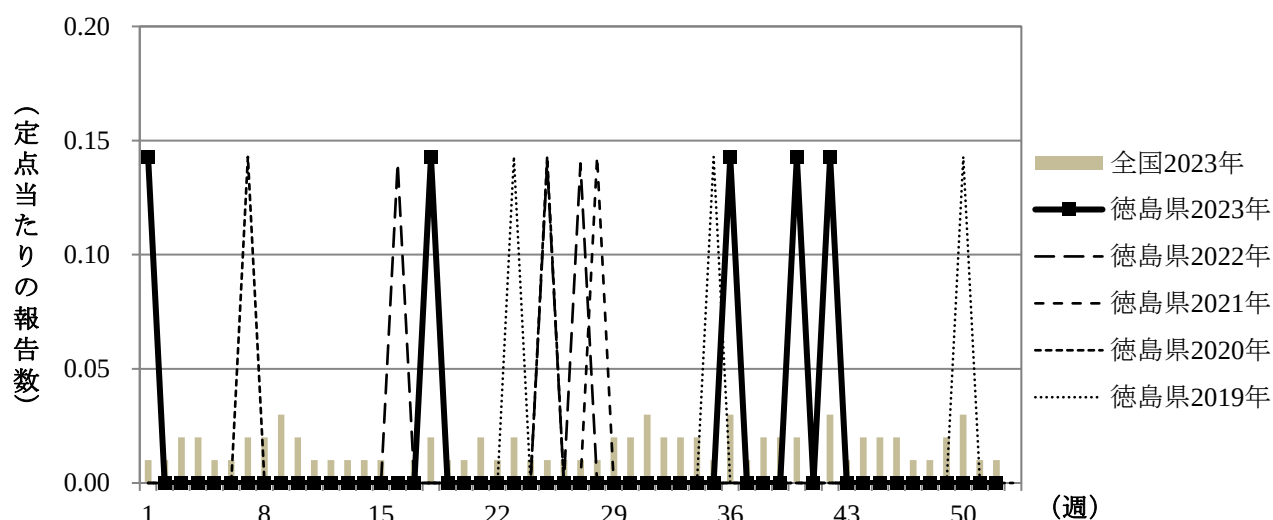
【流行性角結膜炎の週別患者報告状況】



⑮ 細菌性髄膜炎（髄膜炎菌、肺炎球菌、インフルエンザ菌を原因として同定された場合を除く）

年間報告数は 5 人で、年齢層別報告は、70 歳代 1 人、80 歳代 2 人、90 歳代 2 人であった。前年は 4 人で、過去 5 年間では、毎年 1～5 人で推移している。

【細菌性髄膜炎の週別患者報告状況】

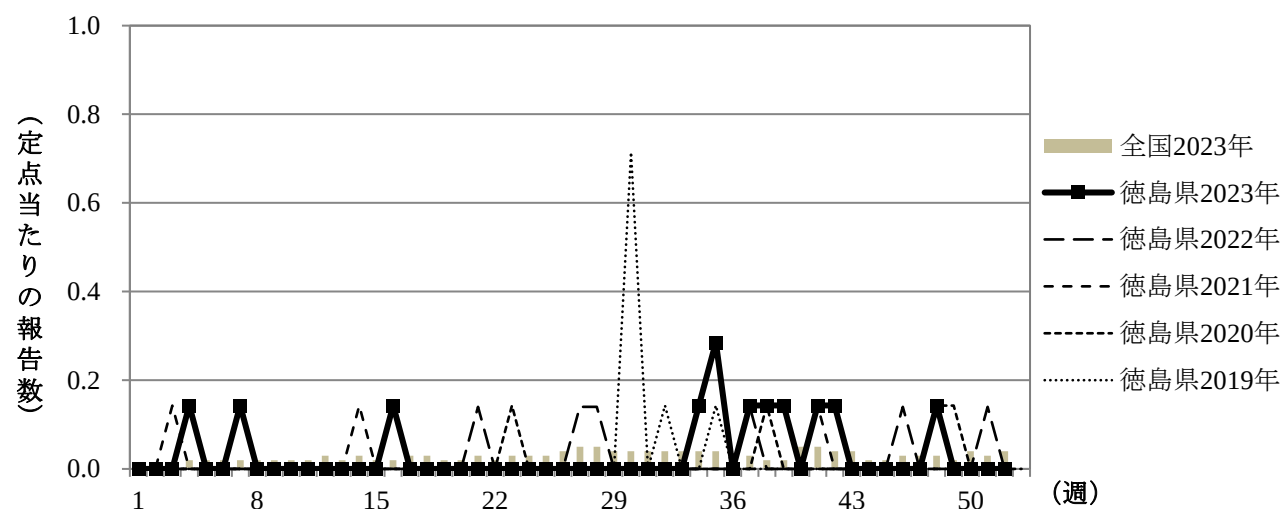


⑯ 無菌性髄膜炎

年間報告数は 12 人（前年 6 人）で、過去 10 年間では、最も多かった。

年齢層別報告数は 10 歳未満 4 人、20 歳代 4 人、30 歳代、50 歳代、60 歳代、80 歳代がそれぞれ 1 人ずつ報告された。

【無菌性髄膜炎の週別患者報告状況】

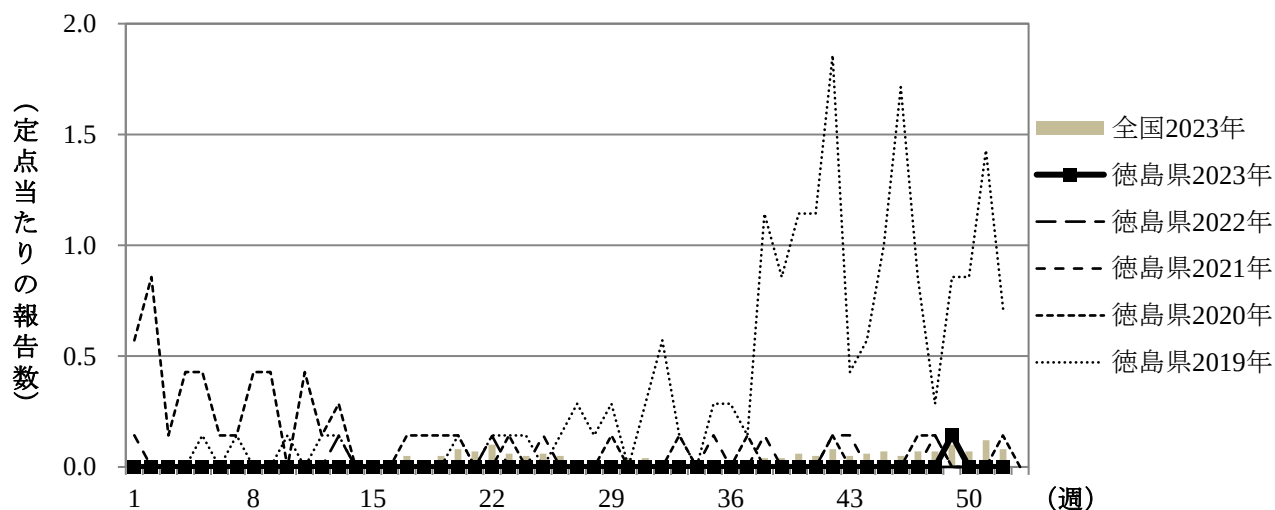


⑰ マイコプラズマ肺炎

年間報告数は1人と、前年（2人）より減少した。本疾患は、年間を通して発生するが、秋から春にかけてやや多くなるとされる。2019年から2020年に流行が見られたが、2021年以降は目立ったピークはなく、低水準（0.14人／定点以下）で推移している。

年齢層別報告数は、10歳代1人であった。

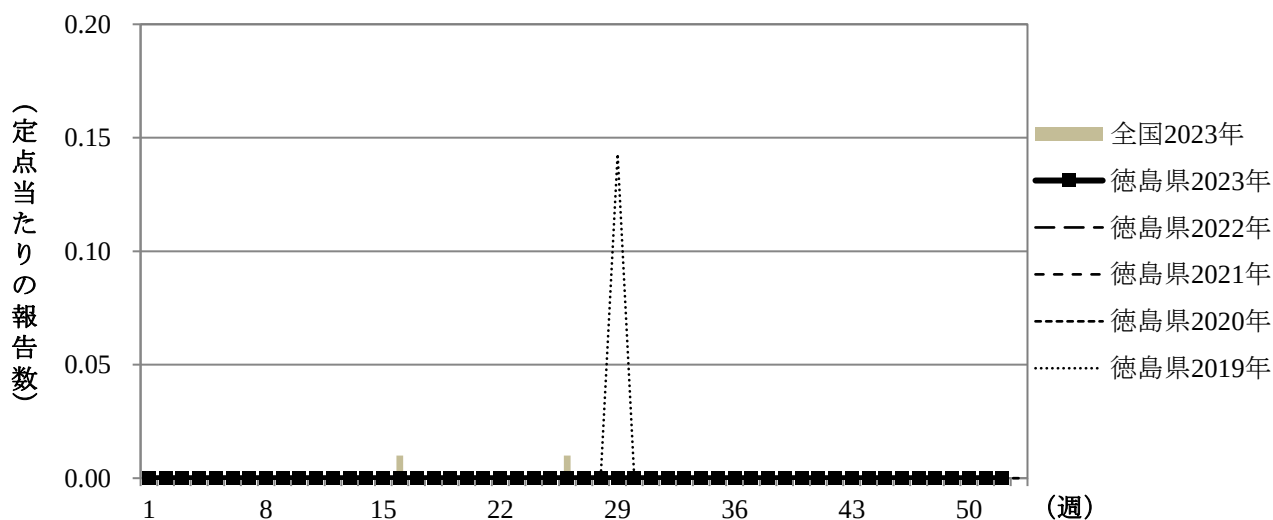
【マイコプラズマ肺炎の週別患者報告状況】



⑱ クラミジア肺炎（オウム病を除く）

本年は報告がなかった。過去5年間では、2019年（1人）以降、報告はない。

【クラミジア肺炎の週別患者報告状況】



⑭ 感染性胃腸炎（ロタウイルス）

前年に引き続き、本年も報告はなかった。過去5年間では2019年の8人が最も多かった。

【感染性胃腸炎（ロタウイルス）の週別患者報告状況】

